



intermission

鎌倉の猫事情

前回までのお話



ミルクホールの愛猫として皆に愛され、時に邪険にされながらも、放浪癖のある三毛猫シュガーは、16年の長き生涯を、ミルクホールの2階にて静かに終えた。

そして一年後。縁あって三重県の山奥より、小さな茶色の毛玉のような子猫がミルクホールにもらわれてくる。グーニーと名づけられた子猫は手のひらに乗るほど小さかったが、猛烈な食欲で、猫としては堅い毛並みの、茶色の顔の真ん中が真っ黒にすずけたようなシャム猫(風)に成長していった。

3ヶ月後、少年グーニーは、家と家とで決めた幼い婚約者スイーピーと運命的な出会いをする。色白で青い大きな目をしたスイーピーに一目で夢中になったグーニーはそれからいつも2匹で走り回り、花の中でたわむれ、小動物をいたぶり、2匹の毎夜の騒ぎについて現われた先代シュガーの亡霊に驚かされたりした。

そして1年後スイーピーは可愛い一粒種の女の子を安産にて出産。すみれと名づけられた。その後次々と赤ちゃんを産み出産と子育てに負われ、グーニーは近所への警戒をおこたらなかった。

が、幸せな日々を暗雲をもたらす大きな黒い影が裏路地に出現する。

それは、不敵な面構えの大きな灰色猫だった。黒い影は常にどこからかグーニー一家つけ狙うように眺めていたのである。

この裏路地界隈は昔、薄茶色の沁みのある白猫がボス猫として長年君臨していたが、年には勝てずシュガーが死ぬ少し前、ポロタオルのようになり姿を消した。そして近所に住んでいた猫たちも次々と死んだり姿を消したりし、ボス猫のいない路地となっていた。

それを嗅ぎつけたかのような灰色猫の出現だった。標的となったグーニーは毎日毎夜全身に手傷を追いながらも闘い続けた。時には深手を負ったまま戦った。どうみても勝てる相手ではなかった。

優勢は決定的と見られると、灰色猫は大胆にも

COLUMN

グーニーと
スイーピーに捧ぐ

ふくろうと猫が海に出た
青豆色のきれいな小船に乗って
たずさえたのは蜂蜜少しと
五ポンド紙幣にくるんだお金たんまり

小船の中でふくろうはギターに合わせて歌い、ふくろうは猫に結婚を申し込む。一年と一日の航海ののち、島に上陸し、豚の鼻先についていた結婚指輪を一リングで買い、七面鳥を司祭として結婚式を挙げる。そして奇妙な晩餐のあとで

手に手つないで 砂浜で
二人は踊った 月の光浴びながら
月の光 月の光
二人は踊った 月の光浴びながら

十九世紀詩人エドワード・リア

猫とふくろうより



ミルクホールへも侵入してくるようになった。ある晩、ついに灰色猫はグーニー一家のくつろぐ部屋へ姿を現した。覚悟を決めたグーニーは、灰色猫を屋根へうながし、最後の決死の闘いをいどんだ。月の光の下、大きな顔の灰色猫と一回り小さなグーニーが睨み合う。勇敢に戦うグーニーを加勢したのは、愛する妻と子供たちだった。

一瞬前まで勝利を確信していた灰色猫は敗れ、その夜以来この裏路地から灰色猫は姿を消した。

前回までのお話はここで終わります。読者のみなさまにお断りしておきますが、これはすべて実話です。この時、グーニーとともに戦ったのは、妻スイーピー、長女すみれ、長男クウの3匹でした。鎌倉の猫事情はまだまだ続きます。第三十九話です。お楽しみに。 ————— to be continued

